

串田孫一編『忘れえぬ山』

山岳紀行の本は、個々の本は沢山出版されているが、最近個人全集や紀行全集の類の全集物は殆ど見掛けることがなくなった。かつての明治・大正時代の登山の黎明期や、それに続く最盛期に活躍したような登山家でありかつ墨客でもあった大御所が全て泉下に入られ、また現在では登山の気風も当時とは随分様変わりしていることもあって、もはやこのような出版物は望むべくもない。

一概に懐古趣味に拘っている訳ではないのだが、山に行く体力も無くなった後期高齢者組の私にはかつて読んだこれらの山行記を繙いて自分自身の登山の来し方に重ねてみるしか楽しみも無くなっているのが哀しいところではあるが、マ、これも老後の暇つぶしのひとつでもあろうか。

これらの謂わば山の古典が書かれた時代の登山の気風や世相、登り方や技術などを遡って概観してみることも興味深いことであろう。

さて、上述したような大御所の紀行文は今では山の古典となっていて、極く一部のロングセラーを除いては書店にも並んでいない。古本屋でも極く少数の著者の個人著作集が出ることはあるが高価なこともあってなかなか手に入りにくい。もっとも、大部の個人著作集を詳らかに繙く程には残された時間も少ないし、その根性もないというのが偽らざる実情である。

そのような訳で、これらの古典を比較的簡単に概観できる書籍を探してみると、ここで紹介する『忘れえぬ山』（全3巻、1959年、筑摩書房）と全12巻の『日本山岳名著全集』（1967年、あかね書房）が頭に浮かぶ。何れも絶版になっているが、前者には長期品切れにはなっているが文庫版もあるので、ここでは前者を紹介したい。

さて、本書には、古いところでは田部重治「笛吹川を遡る」、冠松次郎「初夏の白馬岳」、藤木九三「雪・岩・山稜」、辻村太郎「加賀の白山」や藤島敏男「五月の山旅」などから、次の世代では大御所である榎有恒「アイガー東山稜の初登攀」、松方三郎「燕から槍へ」、三田幸夫「シッキムの或る夜」、今西錦司「アンナプルナ第4峰」、桑原武夫「欧州山岳雑話」など、また比較的新しいところでは川崎精雄「春の上越」、渡辺公平「平ヶ岳紀行」、辻まこと「白い道」、加藤喜一郎「375mを残して」、山口耀久「不帰二峰東壁」、高木正孝「マナスルの偵察」、渡辺兵力「谷川岳と穂高岳」、朝比奈菊雄「穂高山冬期登山」、三宅修「鳥甲山メモ」などが入っている。

編者の串田孫一のあとがきによれば、彼の山の先輩や仲間達にそれぞれの「一番印象的だった山や登山」の紀行文を自身で選んで貰って、更にその選ばれた山行や山へのそれぞれの想いも付記して貰ってこの本を編んだそうだ。そのために、それぞれの紀行の背景や執筆者の思い入れが読み取れて、往時の登山の様相や気風が彷彿としてくる。

惜しむらくは、辻村伊助や小暮理太郎などこの本が編集された時は既に鬼籍に入られていた日本の近代登山黎明期を創られた方々や、加藤文太郎、大島亮吉、板倉勝宣など若くして山に逝ったアルピニストの文章が入っていないのが残念ではあるが、その編集経過からいってやむを得ないことであろう。

「忘れえぬ山」（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）筑摩書房 1959年初版（書影は1966年発行の新版）

ちくま文庫版（全3巻）は1999年発行

